

蓮如の自己形成

加藤 智 見

一

蓮如（一四一五—一四九九）の果たした宗数的な功績は多いが、私が本稿で指摘したい点は、彼の青年期までの自己形成の軌跡とその軌跡を通して、親鸞が果たした弥陀如来の人格的側面からの凝視を、さらに人間的な眼から深めたその根拠である。

親鸞が法身の如来を方便法身、化身という側面から凝視し、究極においては「如来よりたまはりたる信心」の境地に至ったことは、すでに拙著で指摘した⁽¹⁾のであるが、蓮如はこの如来をさらに庶民の眼から、あたかも肉眼で見得るような場に降下させ、肉感的に捉え得るような場にもたせた点に、私は蓮如の独自性を感じるのである。

蓮如は、徳大寺の唯蓮が摂取不捨の意味を知りたいと雲居寺の阿弥陀仏に祈誓したおり、夢想到、「阿弥陀の今の人の袖をとらへたまふに、にげけれども、しかととらへてはなしたまはず。摂取と云は、にぐる者をとらへてをきたまふやうなること、と爰にて思付けり⁽²⁾」ということを、よく引言した。摂取とは弥陀自ら逃げる者をあえて捉えて離さないことだというのである。ここに蓮如が弥陀をきわめて強い人格体としてとらえていることが推測される。

また彼自身、文明五年九月十一日の御文（御文章、以下御文と記す）で「かかる弥陀如来の御苦勞ありつる御恩の

かたじけなさよと、ふかくおもふべきなり」⁽³⁾と書き、また同七年二月二十五日の御文には「阿弥陀如来の、凡夫のためには御身勞ありて」⁽⁴⁾とのべている。さらには同六年五月十三日には「すでに行者のわるきところを、如来のよき御ところとおなじものになしたまふなり」⁽⁵⁾と書いている。親鸞は信心をたまわると言ったが、蓮如は行者の心までをも、如来は自らと同じものとすると言った。ここに蓮如が衆生の眼で如来の生きた心に入りこもうとする意識が顕著であったことが知られる。

蓮如の御文には、「かたじけなさのあまり」⁽⁶⁾、「御恩のかたじけなし」⁽⁷⁾、「うれしさのあまり」⁽⁸⁾、「たふとむべし、よろこぶべし」⁽⁹⁾、「ありがたさのあまり」⁽¹⁰⁾、「御ありがたさ、御うれしさ」⁽¹¹⁾といった類の表現が多いが、如来の人格的側面に入りこみ、その心を凝視する面が強い。このような側面が、実は蓮如の人格を魅力あるものとし、歴史上驚くべき宗教的業績を果たさせた原因の一つになっているのではないかと考えられる。換言すれば、親鸞の信仰に教導されながら、弥陀如来の苦勞を見抜くその眼が、やがて人々の心情、人情の機械を見抜き、短期間に未曾有の宗教集団を形成する一因になったのではないかと考えられるのである。

では、以下このような蓮如の人間性を形成させた根拠を考えていきたいが、本稿では紙数の関係上、彼の幼少年期と青年期のみに限る。十五歳で本願寺興隆を決意したといわれる時までをひとまず幼少年期、結婚し長男順如が誕生した二十八歳頃までを青年期としておきたい。

二

応永二十二年（一四一五）二月二十五日、蓮如は京都東山大谷の本願寺に生まれた。父存如は二十歳、祖父本願寺六世留守職巧如は四十歳であった。実権は巧如が握り、存如はまだ部屋住みであった。この子は本名を布袋、号は幸亭、後に出家して兼寿、法名を蓮如とすることになる。幼少の頃から聡明な子であったといわれる。「幼童の貌より其

心岐嶷にして同稚に卓犖せり」⁽¹²⁾

さてここで問題は母の存在である。母の名は知られていないが、祖父の召使いであったとも言われている。『実悟記』には「我は九州豊後国のともと云所の者なりとぞ宣ける」⁽¹³⁾、『空善記』には「わが御身の御母は西国の人なり」⁽¹⁴⁾と記されているが、詳しくはわからない。ただはつきりしていることは、蓮如が六歳のとき、この女性が蓮如のもとを去ったということである。子ができたからといって存如と正式に結婚できる身分ではなかった。この女性の心中は察してあまりあるが、この年、存如の婚約が決まったのである。その女性は海老名氏の娘であった。海老名氏は將軍義満の側近でもあった。賢明な実母は、これ以上子のそばにすることはできない、否、いない方がよいと判断した。

『実悟記』には「上人六歳のとき、我は是にあるべき身にあらざとて、応永廿七年十二月廿八日東山の御坊後の妻戸より唯一人はしり出給ひしが、行方しらず成給なり。其比上人六歳の壽像を絵師に書せ、表褒衣までさせて、とりて出給ふ」⁽¹⁵⁾とある。鹿の小袖を着たわが子の姿を絵師に書かせて寺を出る日を待っていたのである。

また『遺徳記』によれば、「十二月下旬第八日に母堂六歳の少童に対して語たひけるは、ねがはくは児の御一代に聖人の御一流を再興したまへとて懇に心腑を宣たまふが、そのまゝいづかたともなく出たまひき。…これによりて先師廿八日をもて其命日とし給ひて御志を運たまひけり」⁽¹⁶⁾とされる。母は蓮如に親鸞の一流を再興し、本願寺を確固たる存在にすべきことを願って去ったという。当時の本願寺の状況については後述するが、賢明な母の心情が表れている。蓮如はこの二十八日を後に母の命日とした。この幼児体験は彼の心に何を植えつけたのだろうか。その母が西国の人であると聞いて、「命あらばひとたびくだりたきなり」⁽¹⁷⁾と後々まで語っていた蓮如にである。幼児期における母親の出走はその人物に微妙で深い影響を与える。

先に私は、蓮如は弥陀如来をきわめて人格的に受け取ったのではないか、という点を問題提起したが、実はその傾向の原点の一つがここにあるのではないか、と思うのである。母を思い、母を慕う気持ちが慈愛と慈悲に満ちた生き

た仏の姿を求めさせるようになったのではないか。母への思慕に満ちた眼が如来をそのように見つめさせたのではないか。彼は後に「御母儀は化人にてましくけり、無疑石山觀世音菩薩にてぞおはしける」⁽¹⁸⁾と語ったといわれる。このような思いは、恐らく阿弥陀如来への人格的な接し方に影響を与えていると推測できる。さらにこのような態度は強く「女人往生」を説いた彼の態度と関係がある。当時まで顧みられなかった女性の救いに関して、彼は次のように言及する。「弥陀如来と申は、かかる我らごときのあさましき女人のために、おこし給へる本願なれば、まことに仏智の不思議と信じて、我身はわろきいたづらものなりとおもひつめて、ふかく如来に帰入する心をもつべし。さて、この信ずる心も念ずる心も、弥陀如来の御方便よりおこさしむるものなりとおもふべし」⁽¹⁹⁾。蓮如においてはこのような女性も往生の主体であつて、決して男女の区別はもたれていない。しかも法身の如来が自ら方便し、信ずる心も念ずる心もおこすというのである。もちろん信心も如来から賜るものであるということとは、すでに親鸞によつて言われたことではあるが、あえて女人のためにこのように蓮如がのべていることに注意しておきたい。

また蓮如は生涯に五人の妻を娶つたが、その中で名もなき庶民の出であつた三人目の妻如勝についてだけ、死を悼む御文を書いている。あわれなその妻への思いは、あわれな母への思いと重なるものがあつたと考えられる。「去ぬる八月十七日、物のあはれなることありけり。生年三一歳なりし人の產生の期すぎていくほだなくして死す。惣じてこの人は多年病者の身たりしかば、その期にのぞみては腹中にありしおそろしきおひ物、むねへせきあげて、身心苦痛せしことかぎりなし。いろ／＼の良薬をあたふといへども、まことに先業の所感にてもありけるか、また定業のがれがたくして、つひに八月十七日申剋のをはりにむなしくなりぬ」⁽²⁰⁾。このように立場の弱い女性への思いやりは、蓮如の生い立ちと深い関係をもつといえるし、彼の信仰の独自性、やがては大教団を形成することとも無縁ではない。

さて母が去つた後、父存如は正妻となる如円と結婚した。やがて応永二十九年、蓮如八歳のとき異母妹如祐が生まれる。世の常ではあるが、自分の腹を痛めた子の方が可愛い。継母は蓮如につらくあたるように映つた。情が湧かな

かったのも当然であつたかも知れない。蓮如はこの継母が「一段なさけなくあたりまいらせられける」⁽²¹⁾と語つたことがある。このようは状況は微妙な陰影を蓮如の心の中に植えつけることになる。名のある出身の女性への批判、さらには庶民の出である母を追ひ出すことになつた父への不満、ある種のエディプス・コンプレックスもあつたであろう。強いもの、権威への秘かな反抗心を養うと同時に、弱いものに対する深い共感の態度を形成させることになつた。後に奥州に下向したとき、一夜貧しい人の家に泊まつたとき、何をふるまうべきか困惑し切つたあるじに、あなたが日常食べるものを出して下さいと言ひ、稗を食べて一晚中語り合つたという。『空善記』には、「ひえのかゆをきこしめして、一夜御かたりありてきかせけり、と仰候き」⁽²²⁾と見える。このような苦勞は次第に人情の機微を感じ、人心を包容し、掌握する態度を養うことになる。

永享元年（一四二九）、十五歳のとき、彼は本願寺興隆を決意したといわれる。『遺徳記』には「先師^{せんし}十五歳よりはじめて真宗興行^{こうぎやうこうろぎ}の志し頻^{しきり}にして、一宗の中絶せるを前代^{ぜんだい}仰立^{おほせ}られざる事を遺恨^{ゐこん}に思召^{おぼしめし}、如何^{いかゞ}してかわれ一代にをいて聖人の一流を諸方に顕^{あらは}さんと、常に念願したまひ」⁽²³⁾とある。十五歳にして志を立てるということは古くから言われることであるから、十五歳になつた蓮如がこのことを決意したものであろう。しかしこのようなことをあえて決意したことには理由がある。本願寺の当時の事情を知らなければならぬ。ここで本願寺成立の事情とその後の経緯について触れておきたい。

三

本願寺は元来、親鸞の廟堂つまり墓所であつた。関東の弟子たちが堂をつくり、親鸞の娘覚信尼が守っていたものである。しかし彼女の孫覚如（一二七〇—一三五二）は、これに「本願寺」という寺号をつけ、真宗の本山にしようとしたが、これを支えてきた主として関東の信徒たちから強い反対を受けた。特に親鸞の高弟真仏の専修寺はこれを

契機に絶縁してしまった。親鸞の血を引いているという強みはあったが、その権威を表面に出しすぎ高圧的になりすぎたのである。信徒の志によって成り立っていないながら、高圧的な態度をとったところに無理があった。覚如のようにすぐれた学識をもっている、信徒の人情の機微は別の次元の問題であった。信徒の心をつかみ、親鸞の純粋な教えと血脈の熱い繋がり一体化を知らせるには、蓮如のような人格が必要であった。

蓮如が生まれた頃の本願寺は、現在の知恩院の塔頭崇泰院の境内に位置し、青蓮院の末寺としての小さな存在であった。五間四面の小堂と住坊があるだけであった。『実悟記』によれば、「惣じて御坊中もせばかりいさく、当時はそれ程のちいさき坊は一家中の諸国の坊にも有間敷よし沙汰にて待りき。御坊中の後の方に女中方の御入候つれども、いづ方に女方衆御入候ともみえず、人あるともなく、さびくと御入候つる」⁽²⁴⁾状態であったという。一家中（一家衆）とは、後に本願寺一族の嫡男を一門衆と言ったのに対し、次男以下を一家衆としたのであるが、それらの御坊よりも貧弱であった。女中の住む部屋があったが、女中のいる様子もなく、淋しいものであったという。当然参詣人もきわめて少なかった。

もちろん蓮如の祖父で本願寺第六世巧如（一三七六―一四四六）、父で同七世存如（一三九六―一四五七）も手をこまねいていたわけではない。巧如は応永十八年（一四一一）には親鸞の一五〇回忌法要を修したし、『法華問答』を書写したり、『口伝抄』を下附したりした。存如は北陸の教化に努め、越前の石田に西光寺を建て、多くの聖教を下附したし、永享十年（一四三八）には阿弥陀堂と御影堂を造営した。しかしその阿弥陀堂といっても三間四面という小さなものであった。当時隆盛した同じ真宗の専修寺や仏光寺に比すべきものではなかった。なぜであろうか。本願寺歴代の留守職の努力にもかかわらず沈滞していた理由は、意識の変革がなかったことにある。元来親鸞の教えによれば、信心は如来より賜るものであった。であれば血脈を相承する者も庶民もまったく平等であり、同信同行である。この意識が原点であった。しかし血脈を相承するがゆえに特別であるという意識があった。つまり一種の貴族意識があっ

たのである。それを媒介にして本願寺の力を伸ばそうとしたところに問題があった。加えて堂の給仕を行なう御堂衆や鍵を預かる鑑取役も信徒たちに横柄な態度を取った。これも帰すべきところは留守職の貴族意識にあった。信徒のお陰で留守職であり得ると意識することを妨げることになる。当時の本願寺は天台の青蓮院の末寺の地位に甘んじていた。仏前には浄土三部経だけでなく、天台の經典を置き、護摩壇もあった。一体庶民が何を求め、時代が何を求めているか、専修寺や仏光寺がなぜ繁栄し、本願寺がさびさびとしているのはなぜかの根本的な反省がなかった。歴代の留守職の努力は空回りをしているところがあつた。庶民の出なるがゆえに自分の子と生きながらにして別れなければならなかった実母の心中を思い、貴族意識の身勝手さに悲しい思いをしていた蓮如は、子供心にも次第に本願寺の沈滞の原因を考えるようになった。このような苦勞をした彼は、やがて時代の動きも敏感に読み取るようになる。庶民が時代の中で泣いている悲しみの原因を鋭敏に察知するようになる。半分貴族の血を引いていても、残りの半分は紛れもなく庶民の悲しい血を引いているからである。当時の本願寺の堂の中には上段の間があつたが、後に彼はこれを撤去し、信徒と平座で話し合つた。つまり時代は彼らに意識の变革を迫っていたのである。それに気づかない限り繁栄はやって来ない。人間心理の微妙な動きを鋭敏に感じざるを得ない継子として育つた蓮如は、このことを次第に察知するようになる。と同時にこの苦惱を仏に対座して問い、仏を生きたもの、人格的なものとし、法身の如来ではなく生身の方便法身として親しく接するようになる。

いずれにしても、この当時の蓮如の自己形成に関しては、当時の時代状況を把握しておかねばならない。

四

蓮如が生まれた当時は、室町幕府第四代義持の時代であつた。長い南北の争乱も一応終り、しばらく小康を保っていたが、やがて再び騒乱が始まることになる。もともと室町幕府は南朝と北朝の対立が背景となつて生まれたもので

あった。したがって常に武士たちを懐柔しておかねばならなかった。つまり強力に統制できないという弱みがあったのである。ここに下剋上が生まれる素地があった。武士の間の下剋上と同時に、蓮如が本願寺興隆を決意した永享元年の前年には正長の土一揆がおこり、債務を棒引きにすることを要求する徳政要求が獲得された。元年には播磨の土一揆がおこり、人々は守護と戦った。つづいて丹波の土一揆、出雲の土一揆がおこった。同四年になると伊勢の土一揆がおこり、さらに大和の土一揆は赤松氏の兵を破った。そして嘉吉元年になると嘉吉大一揆がおこった。京都の周辺に蜂起した人々の数は七千から八千といわれる。彼らは十六カ所に陣を敷き京都を制圧した。単に農民だけでなく、土豪や武士がこれに加わっていた。このことは一揆が局地的なものではなく、広範囲なものに拡大する可能性をもっていた。さらに一揆の主役は農民や下級武士だけではなく、馬惜、僧侶、牢人、荘民たちが絡んでくることになる。下剋上の風潮はいよいよ盛んになっていく。地方の戦禍は中央の力ではどうしようもなくなる。次第に社会秩序や制度を破壊するようになっていく。このような状況は次第に庶民を台頭させることになる。

また応永から寛正にかけて飢饉が頻繁であった。飢えに襲われた人々らはもはや自分の命を為政者に委ねてはもらえなかった。物心両面で何かをつかみ取らねばならなかった。骨肉相喰む為政者に対する不信感は、絶対に帰依し得る確実なものを庶民に求めさせるようになる。

蓮如の少年時代は荒れた時代ではあったが、その奥でこのような気運がみなぎり始めた時代であった。ちょうど親鸞が在世した平安末期から鎌倉時代の状況に通じるものが、ここにはあった。公武の争いと打ち続く天災地変の時代という点である。両時代にはもちろん相違はあるが、少なくとも庶民が俗権を超えた何か大きく強い力を要求した時代であると言える。本願寺の近くの仏光寺はこのような時代の要求を満たしていた。蓮如は子供ながらに、このような庶民の悲しさと願いの強さを知っていた。時代の動きを膚で感じていた。十五歳の本願寺興隆の決意はこれと無縁ではなかった。無常な世を渡るには一刻も早く自己の信心を確立せねばならない。「仏法には明日と申事有間敷候。仏

法の事はいそげく⁽²⁵⁾と後に語ったように、戦乱の時代であること、そのような時代にあつて蓮如自身何をすべきかを、彼は考えていた。急迫した時代には、たとえ子供であつても緊迫した思いを抱くものである。彼の自我形成の背景にはこのような面があつたことを留意しておかねばならない。

次に青年期の自己形成の考察に移る。

五

蓮如が本願寺興隆を決意した十五歳という年齢は、一般の人にとっては元服の年齢であつた。青年期の明確な意識がもたれたことであろう。

翌々年永享三年(一四三二)、蓮如は青蓮院にて剃髪し、得度を受ける。日野家の系統であり当時権中納言であつた広橋兼郷の猶子つまり仮の子となつて得度を受けたのである。諱は兼寿、法名は蓮如であつた。こうして天台の僧になるのであるが、このこと自体がすでに矛盾していることであつた。親鸞自身は比叡山を去り、浄土の真宗に帰入した人間である。なぜその一流を受け継いだ蓮如が天台の戒師のもとで得度をしなければならなかつたかである。ここに当時の本願寺の主体性の欠如が考えられる。

これ以後、ほぼ独学で親鸞の教義を学ぶことになる。いささか美文調に流れてはいるが、『遺徳記』に次のようにのべられている。「涼焰^{りやうゑん}ときをわかつたず、或は炎夏の短夜には螢^{あつめ}を聚^{しやういん}て車胤^{とらふら}が古事を訪^{とらふら}ひ、玄冬^{ぐゑんとう}の寒夜には雪^{たづさへ}を携^{せん}て宣士^しが旧儀^{きうぎ}を試む。しかるにそのころはいまだ一流^{いちりゅう}の義しかくとしる人おほからざるあひだ、佗門^{たもん}佗家^{たけ}の覚^{おぼえ}も幽微^{ゆうゐ}なり。しかればつねに人をおそれ世を憚^{はづか}り給^{たま}へり。聖典^{しやうてん}を拝するにも竊^{ひそか}に人看^{じんかん}を忍^{しの}び、是^{これ}を閱^{よみ}し給^{たま}ひにも或は隔壁^{かくへき}の燈^{ともしび}のすきまより漏光^{ろうくわう}を得、或は閑晴^{かんせい}なる夜は青霄^{せいせう}に澄^{すみ}る月暉^{ぐゑい}をもて文籍^{もんじやく}を披^{ひら}き師釈^{ししやく}に心をつくし、斯^{かく}のごとくして『教行証の文類』^{ならび}并に『六要鈔』四部の釈義を引合せ是を涉獵^{せふれつ}し、具^つに惴惴^{しんし}して深旨^{しんし}を極め、書の肝腑^{かんぶ}を描^{ぬき}で彼要文^{かの}をば作

出せるなり」。(26) あえて言えば父存如と叔父の空覺に指導を受けたくらいである。貧困に耐え、地道に着実に学び、抜き書きを作っていた。この他に親鸞の『和讃』、覚如の『口伝鈔』『改邪鈔』、作者ははっきりしないが、『安心決定鈔』、そして『歎異鈔』などを熟読していった。蓮如は後に「本尊は掛やぶれ聖教は読やぶれ」⁽²⁷⁾と言ったというが、味読し精読し読み破るほどに熟読した。彼にはいわゆる回心がなかったといわれることもあるが、これらの書物の肝腑を抽出し、御文に親鸞の信心を的確に再現し得たということは、親鸞を追体験し、次第に親鸞の回心の過程を踏んだということであり、回心がなかったと断定できるものではない。このような研鑽と精進は、やがて御文の作成に役立つこととなる。

さて継母如円はその後、見瑞、如勝を生んだ。三人の娘を生んだ後、蓮如十九歳のとき、長男応玄を生む。男子が生まれたことは、当然のことながら本願寺留守職の継承をめぐる複雑な問題を引き起こすことになる。継母にとつては当然実子が可愛いのであり、継承する者は素性の分からぬ母をもつ蓮如であるべきではなかった。いずれが聡明であるかどちらが器量が大きいかという客観的な問題ではなかった。継母の冷たい蔑みの目に自分をさらしながら、継承までの十四年間を蓮如は堪え忍ばなければならなくなった。

蓮如二十二歳のとき、祖父巧如は父存如に留守職讓状を与えた。つまり継承であった。

そのような状況の中で蓮如は必死に研鑽に励んだ。彼が二十六歳のとき、巧如が死去した。

やがて蓮如二十八歳の嘉吉二年(一四四二)、彼の長男順如が生まれた。このことから、その一、二年前に蓮如は結婚したと推測される。妻となった如了は伊勢氏の出、平貞房の娘であった。伊勢氏は幕府の要職についていた。このことは蓮如の今後に関係をもつことになる。

さて、このようにして本願寺は、存如、その妻如円、その子供たち、そして蓮如、その妻、子供の大世帯になる。貧困は並みのものではなかった。油のないときは、薪を燃やした。「黒木を御焼候て、聖教などを御覧ぜられ候。又

月夜の比は月の光にて御覧ぜられけるとさふらひつる」⁽²⁸⁾ また、たとえば衣服も、「御衣はかたの破たるをめされ候。白き御小袖は美濃絹のわろきをもとめやうく一つめされ候」⁽²⁹⁾、「紙にて裏をさせられ、御袖口ばかりを絹にてすこしさせられて、めされさふらひき」⁽³⁰⁾という状態であった。足も水で洗うほどであった。「御足をも大概水にて御洗候」⁽³¹⁾食物に至ってはさらに深刻であった。「二三日も御膳まいり候はぬことも候よし、承及び候」⁽³²⁾汁なども水でうすめて量を増やし三人ですすったこともある。「供御の御汁は御一人の分あなたより参せられさふらふを、水を入てのべさせられ、御三人みなくきこしめしたる、と申候」⁽³³⁾

しかしこのような不如意は人間蓮如を鍛え、深い心を形成させた。後に『蓮如上人御一代記聞書』には、「御膳を御覧じて、人のくはぬ飯をくふことよと思召候と仰られ候。物をすぐにきこしめすことなし、たゞ御恩のたふときことをのみ思召候と仰られ候」⁽³⁴⁾とある。庶民の生活をし、庶民の意識を自己のものとし、それを不可欠に仏道と結びつけていった。觀念でなく、生活の中に仏を降下させた。庶民の頭上というより、庶民の生活と心の中に生きた仏を住まわせ、単なる物であつても仏のものと意識させるようになった。「蓮如上人御廊下を御とほり候て、紙切のおちて候ひつるを御覧ぜられ、仏法領の物をあだにするかやと仰られ、両の御手にて御いたゞき候と云云。総じてかみのきれなんどのやうなる物をも、仏物と思召御用ひ候へば、あだに御沙汰なく候の由、前住上人御物語候ひき」⁽³⁵⁾

貧困のために召し使いも雇えず、赤ん坊のむつきすら自分で洗った。「人をも甲斐くしくめしつかはれ候はであるゆへ、幼童の襁褓をも御ひとり御洗候、など仰られ候由に候」⁽³⁶⁾やがて次々に生まれてくる子供たちを養いかねて喝食や比丘尼にすることになる。このような生活をしながら、蓮如は本願寺の不如意の根本理由はどこにあるのか、なぜ子供たちを犠牲にしてまで本願寺を守らねばならないのか、他の真宗諸派が栄えているのになぜこの本願寺がさびさびとした現状を打破できないのか、真の布教とはどのようなものであるか、新しい時代、社会から取り残されている原因は何であるか、を次第に切実に考えるようになる。ここで真宗他派の当時の状況を見ておきたい。

六

当時真宗諸派の中で隆盛していた代表的な派は、仏光寺派と三門徒派であった。

まず仏光寺派について考えておきたいが、仏光寺を創設した了源（一二九五—一三三六）は、本願寺覚如を訪ね存覚の指導を受けた人物であった。興正寺を建立したが、後に仏光寺と名を改めた。この仏光寺が急速に発展した理由は、了源が考えた「名帳」と「絵系図」の作成にあった。そもそも了源によれば、僧は本願を布教する来迎の弥陀如来であり、本願そのものであるという。人々はその教えを信じて一念発起すれば、極楽往生間違いないとなるという。僧と阿弥陀仏は等しいのでその僧により往生を認められた者は阿弥陀仏位に入り得るというのである。了源は、名帳を使い信徒の名を書き連ねていった。法然以来脈々と続いてきた往生決定の系列の中に庶民の名が書き記されていくのである。人々は感激した。自分の名が書かれるとき、その場で往生が決定されるのである。魅力であった。僧と寺にとっては、そのとき信徒がそのまま獲得できることになる。すでに覚如は、「名帳みやうちやうと号してその人数にんじゆをしるすをもて往生浄土の指南とし、仏法伝持の支證ししやうとすといふことは、これおそらくは祖師一流の魔障たるをや。ゆめ／＼かの邪義をもて法流しやうぎの正義とすべからざるものなり」と批判していた。⁽³⁷⁾

また絵系図とは、始めに系図作製の理由を書き、次に了源を筆頭にして相承の関係を絵で示したものである。この絵系図は本尊として拝まれるものであるだけに、この系図の中に自分が描かれるかどうかは、僧たちの最大の関心になる。なぜ本尊として拝まれるかというと、僧が弥陀と同等であると考えられていたからである。僧は絵系図に描かれることを欲し、信徒はその僧に往生を保証してもらいたかったのである。こうして金品、施物は信徒から僧へ、僧から仏光寺に集まっていた。このような在り方は、ただ阿弥陀一仏のはからいによつてのみ往生が定まるとう親鸞の教えとは相違する。仏の前には僧も在家の信徒も同じ同朋であり平等であるという親鸞の教えとは異なる。往生

を与えたり奪ったりする権利は僧にはないのであり、名帳も絵系図も親鸞の信仰とは関係がないのである。ただ庶民の欲望を上手につかんだに過ぎなかった。覚如はこの絵系図も激しく非難した。「絵系図と号して、おなじく自義をたつる条、謂^{いは}なき事。：祖師聖人の御遺訓^{ごゆいくん}として、たとひ念仏修行の号ありといふとも、道俗男女の形体^{ぎやうたい}を面々各々図絵して所持せよといふ御おきて、いまだきかざるところなり。しかるにいま祖師先徳^{せんとく}のおしへにあらざる自義をもて諸人の形体を安置の条、これ渴仰^{かつがう}のため歟、これ恋慕のためか、不審なきにあらざるものなり」⁽³⁸⁾。また蓮如も「ただ弟子のかたより、坊主へ細々音信も申、又物をまゐらせ候を、信心の人と仰られ候。おほきなる相違にて候。よくこの次第を御ころえあるべく候。されば当世は、みなくかやうのことを信心の人と御沙汰候、もてのほかあやまりにて候」⁽³⁹⁾と批判する。このような態度を「物とり信心」だというのである。しかしこのような異端的な傾向が、得てして人々の心を奪うのである。ここに蓮如は人間の弱さをまざまざと見せつけられる思いがしたことであろう。と同時に魅力をもって人の心を引きつけ、しかも正しい信仰を説く方法とは一体どのようなものであるかの問いを、彼自身に突きつけていったことが察せられる。貧しい生活を送り、人々から見捨てられた本願寺にあり、ひたすら批判にのみ終始していた覚如とちがって、蓮如は人心に食い込む方法を貴族意識を捨てて考え抜いていった。

次に三門徒派はどのようにして繁栄していたのだろうか。仏光寺は京都を中心に勢力をもったが、この派は北陸を中心に広まっていた。「三門徒」という呼称については、専ら親鸞の和讃を読むことに専念したため、「讃門徒」と呼んだのが転じたとも言われるが、如導（一二五三—一三四〇）が越前大町に専修寺を開創し、ここを拠点として教線を拡大した念仏集団の総称である。もともと高田の専修寺は、「唯授口訣」の考え方を継承し、歴代の住持は「親鸞位」になって法脈を受け継いできたという。血脈による本願寺とは異なっていた。如導はさらに、親鸞の教えは唯一人に授けられたのであって、この者が信徒の主座になり、親鸞と同じ位にのぼると主張したのである。これを自ら「秘事法門」と呼び、往生が決定すれば自分そのものが仏になると説いた。であればもはや仏像も拝む必要はなくなる。仏

となった自分の心を拝めばよいことになる。經典もよまず、礼讃もせず、袈裟や衣や数珠も身につけず、男女が同じ席につき、肉食もかまわず、ただ名号を唱え、和讃を唱えた。死者追善の卒塔婆もたてず、禁忌も無視するといったラジカルなものであった。一念して往生が決定すれば、その人は阿弥陀仏になるのであって、この世のいかなる定め事にも制約されることはない。信心がおれば即座に生身のままに仏になると彼らは信じた。この即身成仏的な教えは人々を引きつけた。真言宗や時宗や民間信仰の中にあつた人々の心を吸収することができたのである。越前から加賀にかけて広がっていった。

しかしここで問題になる点は、一念すれば往生が定まり仏となるというのは、確かに親鸞の教えに通じるかのであるが、往生に導き仏にさせるのが僧であると説いた点である。仏と等しくせしめるのはあくまで阿弥陀仏である。仏に等しくせしめられるのに僧俗の区別はない。往生を与えるのは仏以外にないからである。

蓮如は後に厳しくこの異端を諫めている。「当流にその沙汰なき秘事法門といふことを手作てづくりにして諸人をまよはしむる条、言語道断の次第なり。この秘事をひとにさづけたる仁体においては、ながく悪道にしづむべきものなり」⁽⁴⁰⁾。あくまで念仏は仏への報謝であつて、即身成仏の道具でもなく、僧に対して唱えるものでもない。「ただ弥陀如来の御恩徳のふかきことをのみおもひて、その報謝のためには、行住座臥をいはず、南無阿弥陀仏となへんよりほかのことなきなり。なほもてこのうへにわづらはしき秘事ありといふやからこれあらば、いたづらごととこころえて、信用あるべからざるものなり」⁽⁴¹⁾。

しかし親鸞の正統的な教えをどんなに叫んで異端を退けても、それだけで民衆を救えるものではない。現に仏光寺派も三門徒派も人々を引きつけているのである。何を人々が渴望しているかを知り、しかもその心を潤すためには、親鸞の教えを噛み砕き、その渴望の妙薬として与えねばならない。渴望を責めているばかりでは何にもならない。それが病であれば、病人の手に触り、皮膚に触れ、脈をみねばならない。そして適切な薬を調合しなければならぬ。

さらにはその病人が置かれている環境も知らねばならない。蓮如は本願寺の片隅で、継母の冷たい眼差しと仕打ちに耐え、子供のむつきを洗ったり、たまに訪れる信徒と語り合いながら、その方法を探り求めた。親鸞の著作を精読し、耳をそばだてて彼の肉声を聴こうとした。また法身の如来がわざわざ法蔵菩薩となった仏の苦悩の中に、わが苦悩と庶民の苦悩の根源を聴き取ろうとした。

ここに彼の青年期の苦悩の根柢があったと思えるし、この苦悩の体験によって青年期の自己が形成されていったと考えられる。この自己形成は、後の真宗教団形成の原動力の一つになる。

七

さて最後に、自己を形成する要素の一つである精神と肉体の相関関係の理論を援用することによって彼の気質を分析し、すでにのべてきた蓮如の自己形成の特色をさらに明確にしておきたい。

体格と気質の関係を研究したクレッチュマーの功績を援用したいが、私は以前すでに親鸞についてもこれを応用した。したがって拙著『親鸞とルター』を参照していただければと思うが、親鸞はいわゆる「闘士型」の体型で粘着性気質に親和した。これに対して蓮如の場合は、ほぼ確実に「肥満型」(Pyknischer Typ)の体型で気質は「循環性気質」(das zyklische Temperament)に親和すると思える。以下この点について考えてみたい。

蓮如の体型を比較的良好に現しているものに、京都の西法寺所蔵「親鸞・蓮如連坐像」がある。二人の姿を上下に描いたものであるが、親鸞の像がその面影をよく捉えていることからして蓮如の姿も信憑性があると考えられる。この像によると、クレッチュマーが肥満型の特長としてあげる「姿はずんぐりしていて両方の肩の間に短く太い頸部があり、顔は柔和であって広い。下にいく程広がっていく湾曲した厚い胸の下から、大きい脂肪腹が出ている。四肢は、よく見ると柔らかで丸みをおびている」(gedrungene Figur, ein weiches breites Gesicht auf kurzem massivem Hals

zwischen den Schultern sitzend; ein stattlicher Fettbauch wächst aus dem unten sich verbreiternden tiefen, gewölbten Brustkorb heraus. Betrachten wir die Gliedmaßen, so sind sie weich, rundlich.)⁽⁴²⁾ 等の特長をほほめていえる。

また蓮如の気質は、この肥満型に親和する循環性気質によく合致している。この点に触れておきたいが、クレッチュマーはこの気質について「思い切り話し、笑い、泣きたいと思っている。ごく手近かな自然の方法、つまり他人との交際により、自分たちの情緒を適当に動かし、喜ばせ、清々させようとする」(Sie haben das Bedürfnis, sich auszusprechen, auszulachen und auszuweinen. Sie suchen auf dem nächsten, natürlichen Weg das, was ihr Gemüt in die ihm adäquate Bewegung bringt, es erfreut und erleichtert: im Umgang mit Menschen.)⁽⁴³⁾ 傾向があると指摘している。

蓮如はいつも人々にものを言うこと、話すことをすすめた。「同行寄合候ときは、たがひに物をいへく、と仰られ候。：物を申せば、心中もきこへ又人にもなをさるゝなり」⁽⁴⁴⁾ 親鸞は寡黙で我慢強かった。しかし蓮如は喜怒哀楽を素直に出したし、出すようにすすめた。「心にうれしきことはそのまゝなるものなり。寒ければ寒熱ければ熱、とそのまゝ心の通りいふなり」⁽⁴⁵⁾ と言っている。この点は循環性気質の特長をよく示している。さらに人との交際をすすめ、「同行・善知識にはよくくちかづくべし」⁽⁴⁶⁾ と言う。そして人を喜ばせ、人の心を軽くしようとした。「蓮如上人、あるひは人に御酒をも下され物をもくだされて、かやうのことをありがたく存候て近付させられ候て、仏法を御きかせ候」⁽⁴⁷⁾

またクレッチュマーは指摘する。循環性気質は「現在の環境の気分溶けこみ、すぐ共鳴し合い、仲間となって順応し得る。いかなる些細な事、どんな対象も、暖かな感情で接する。世界は『愛に満ちており感謝すべきもの』と感じ得る。：社交的で親しみがあり、現実主義的であつて適応性がある」(sie vermögen in der Stimmung des Augenblicks, des Milieus aufzugehen, sogleich mitzuschwingen, teilzunehmen, sich hineinzufinden. Jede Kleinig-

keit, jeder Gegenstand bekommt etwas von dem warmen Gefühlston mit. „Liebevoll und dankbar“ wird die Welt empfunden:……gesellig, menschenfreundlich, realistisch und anpassungsfähig gestimmt.⁽⁴⁸⁾

蓮如はだれとも仲間になって雑談をした。「おれは寒夜にも蚊の多き夏も、平座にてたれぐのひとにも対して、雑談をもする」⁽⁴⁹⁾ 従来本願寺にあつた上座を蓮如は取り外し、平座で人に接した。そもそも如来から信心を賜る者は親鸞によればだれしも同朋であり、兄弟であつた。蓮如はそれを受けて「仰に、身をすてゝをのゝくと同座するをば、聖人のおほせにも、四海の信心の人はみな兄弟と仰られたれば、我もその御ことばのごとくなり」⁽⁵⁰⁾と語っていた。このような態度には誰とでも仲間になる面があり、暖かに接し得る氣遣いが伴うことになる。「信をえたらば、同行にあらく物も申まじきなり、心和ぐべきなり」⁽⁵¹⁾と言つた。同行には柔らかにものを言うべきであつて、さらには暖かくこれらの人々に接しなければならないと言う。「仏法の讃嘆のとき、同行をかたぐと申は平外也。御方々と申てよき由仰ごとゝ云云」⁽⁵²⁾ またある時、念仏を唱えていた蓮如が念仏の心を人に聞いたが、その人が返答に窮していると、「これはわれを御たすけ候御うれしやたふとやと申心よ」⁽⁵³⁾と語つたという。信仰を求め信仰に生きて、クレツチュマーのいうように、世界に素直に感謝する心情である。

さらに蓮如の現実適応性についてであるが、よく知られているように「於三流中^{オモテ}仏法を面とすべき事、勿論也。雖然、世間に順じて王法をまもる事は、仏法を立てんがためなり」⁽⁵⁴⁾ という面には、蓮如の現実を見すえ、順応しながら信念を通す態度が考えられる。この態度はクレツチュマーが、「悲劇的に尖鋭化した戦いはしない」(keinen tragisch zugespitzten Konflikt)⁽⁵⁵⁾ という態度に合致すると思える。

以上の側面から蓮如の氣質はほぼ確実に循環性氣質であると考えられる点を指摘しておきたい。

幼くして母に生き別れ、継母の冷たい目にさらされ、貧窮の中に少年期、青年期を送り、さらには結婚してもいまだ部屋住みの生活に耐えたことは、生来の循環性氣質の特徴である人情の機微をつかみ人の心を引きつける面を練り

に練った。この側面はやがて本願寺教団を飛躍させる重要な素地になる。と同時にこのような体験を積みながら親鸞の教義を、やはり循環性気質の素地のもとに研鑽したことは、阿弥陀如来の存在を抽象の世界の存在とすることなく、また觀念の次元で思索することなく、最も人格的な眼から、しかもいかなる庶民の心にも打ち響く存在に降下させる原因の一つになっていったと考えられる。この両面は「おれは門徒にもたれたり」と。ひとへに門徒にやしなはるゝなり。聖人の仰には弟子一人ももたずと、たゞともの同行なり、と仰候きとなり⁽⁵⁶⁾という謙虚な姿勢となり、信徒の心を引きつけ、同時に「しかととらへてはなしたまは」⁽⁵⁷⁾ざる、「にぐる者をとらへ」⁽⁵⁸⁾る仏に気づかしめ、その仏を人々に説き至る態度を蓮如にとらせ、従来の本願寺の貴族的な態度を捨てさせ、真宗の教義を民衆に浸透させる原因になったと推測される。

蓮如の自己形成を、ひとまず青年期までたどってみたが、以上の諸点を問題提起しておきたい。これ以後の波瀾に富んだ壮年期、老年期の考察については他日を期したい。

注

- (1) 『親鸞とルター』（早稲田大学出版部、一九八七）三頁
- (2) 『実悟旧記』（稲葉昌丸編『蓮如上人行実』、法蔵館、一九七二）所収、一〇六頁
- (3) 『御文』（笠原一男校注『蓮如文集』、岩波文庫、一九九〇）五一頁
- (4) 同右、一四六頁
- (5) 同右、一一六頁
- (6) 同右、九頁
- (7) 同右、一一頁
- (8) 同右、三八頁

- (9) 同右、六九頁
- (10) 同右、一〇五頁
- (11) 同右、二二二頁
- (12) 『蓮如上人遺徳記』（『真宗聖教全書』三、大八木興文堂、一九八八）所収、八六九頁
- (13) 『実悟記』（『蓮如上人行実』）所収、一四五頁
- (14) 『空善記』（『蓮如上人行実』）所収、三八頁
- (15) 『実悟記』一四四―一四五頁
- (16) 『蓮如上人遺徳記』八七〇頁
- (17) 『空善記』三八頁
- (18) 『実悟記』一四四頁
- (19) 『御文』八一頁
- (20) 同右、一七八―一七九頁
- (21) 『実悟記』一四五頁
- (22) 『空善記』四〇頁
- (23) 『蓮如上人遺徳記』八七一頁
- (24) 『実悟記』一四四頁
- (25) 『蓮如上人御一代記聞書』（『真宗聖教全書』三）所収、五五七頁
- (26) 『蓮如上人遺徳記』八七一頁
- (27) 『実悟旧記』七一頁
- (28) 『蓮淳記』（『蓮如上人行実』）所収、六四頁
- (29) 『蓮如上人御一代記聞書』五六八頁
- (30) 『蓮淳記』六二頁

- (31) 『蓮如上人御一代記聞書』 五六七頁
- (32) 『実悟旧記』 八九頁
- (33) 『蓮淳記』 六二頁
- (34) 『蓮如上人御一代記聞書』 六〇〇—六〇一頁
- (35) 同右、六一一頁
- (36) 『実悟旧記』 八九頁
- (37) 『改邪鈔』（『真宗聖教全書』三）所収、六四頁
- (38) 同右、六六頁
- (39) 『御文』二〇頁
- (40) 同右、一八五—一八六頁
- (41) 同右、一八七頁
- (42) Ernst Kretschmer: Körperbau und Charakter, Verlag von Julius Springer, Berlin, 1931, S. 27.
- (43) Ibid., S. 119.
- (44) 『実悟旧記』 七五頁
- (45) 同右、一〇五頁
- (46) 『蓮如上人御一代記聞書』 五六八頁
- (47) 『実悟旧記』 一〇八頁
- (48) Kretschmer: Ibid., S. 119.
- (49) 『空善記』 一一頁
- (50) 『蓮如上人御一代記聞書』 五四三頁
- (51) 同右、六〇六頁
- (52) 同右、五九八頁

- (53) 『実悟旧記』 九九頁
- (54) 『空善記』 五六頁
- (55) Kretschmer : Ibid, S. 119.
- (56) 『空善記』 三六頁
- (57) 『実悟旧記』 一〇六頁
- (58) 同右、一〇六頁